

蓋を剥き、容器に湯を注ぐ。平らに戻し、蓋の端を折つて固定した。携帯端末の数字がカウンタウンを始め、俺はキツチンの窓から外を見やった。

生垣の向こうを女が歩いている。小さな白い顔を寒風にさらしていた。吐く息と黒いタートルネックの妙。

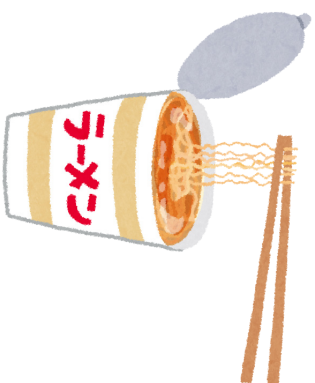
そして、俺のカップ麺が伸びる。

恋は甘いか　じょっぱいか
食べてみなけりやわからぬに
夢かまこゝとか　まこゝとか夢か
とかく浮世は地獄です



三分間の恋

小腹が空いたら



カップ麺が伸びる条件は以下の通りである。

キッチンに立ち、彼女は紅茶を淹れていた。

購入したケーキはひとつ。俺は甘いものが苦手である。

しかし、小腹は空いていた。

ケトルの湯を相伴し、カップ麺の容器に湯を注ぐ。

「そういうの食べると舌がバカになるよ」

他愛無いおしゃべり。

キツチンにカップ麺の容器が二つ並んでいる。

「おまえの彼女」

友人は腕時計を睨んでいた。

「俺の元カノなんだ」

「はあ？」

「むこうの浮気で別れた」

がむしやらに友人は、カップ麺を食べ始めた。容器の中で俺のカップ麺が伸びる。

俺が、三分ちようどのカップ麺にありつく日はやってくるのだろうか。

彼女と俺は、カップ麺を食べた。

「今の話って重要？」

彼女はスープに沈んだ具を箸で探っている。

「……たぶん」

「わかった」

隣へ寄り添い、俺に笑顔を見せた。

「説明するけど、その前に、おいしかったかどうか教えてくれる？」

彼女の顔が近付いてくる。カップ麺が伸びることは、おそらくもうないのだろう。

はてさて二人の恋の道行
湯気のむこうに見え隠れ
げに恐ろしき苦界の身の上
三分ぢきは五里霧中



小腹が空いたら三分間の恋

小腹が空いたら三分間の恋

題 名 小腹が空いたら三分間の憩

作者 トーサツ

発行日 2015年2月28日

twitter : @donut_no_ana

tumblr : <http://donut-st.tumblr.com/>

イラスト : <http://www.irasutoya.com/>

※自作の twonovel を改稿、再構成しています。